
カメの名前を決めたよ

戸理 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カメの名前を決めたよ

【Nコード】

N18910

【作者名】

戸理 葵

【あらすじ】

今朝、彼の夢を見ました。切なくて、でも凄く幸せな夢でした。目が覚めて、普段通りの一日が始まりました。一通のメールを受け取るまでは。差出人は、一年前に死んだ彼から？誰なの？彼のフリをして私にメールを送ってきたのは？！

「早く買い物に行かなくちゃ。」

あたしがそう言うのと、舜しゅんは不思議そうに聞いた。

「買い物って？何、買うの？」

「色々、準備があるじゃん。水着とかさ、日焼け止め、とか。」

あたしが彼を見上げると、

彼は、チョツピリくせ毛の前髪の下に隠れている、女の子みたいにパツチリとした目を少し細めながら、

男にしては厚みがあって柔らかかそうな唇を少し上げて、クスツと笑った。

「そんなのさ、向こうで買えばいいんじゃないかね？散歩がてら、とかさ。どう？」

スツキリとした彼の顎が、あたしの目線のちよつと上にある。

最近、痩せたんだよなあ。仕事が忙しいからだ。

食べる事が大好きなくせに、何かに集中したり忙しくなりすぎると、食べる事がおろそかになるんだ、この人は。

「水着なんて、『ついで』で買うもんじゃないよー。本気買いなんだから。プラントンに行きたいっ。」

「わかった、わかった。」

どうどう、と言うように、舜は両手を少し上げて「降参」のポーズを取り、

その右手で、あたしの背中をポンポンと叩いた。

「銀座ね。じゃ、今度の週末に行くか。」

「休めるの？」

「うーん、多分？」

ちよっぴり困ったような笑顔。また、新人だからって休日に駆り出されるのかもしれない。

水着なんて、一人でも買える。

むしろ、可愛くってオーソドックスな水着を買って、当日ビーチでお披露目した方が、舜はウケるかもしれない。

舜の好みは分かりやすいもん。

それに舜の「散歩がてら」に付き合わされたら、大変な事になる。本気で「街中探索」みたいになっちゃって、ちい散歩どころじゃないくらいで、

ミュールやヒールのあるブーツを履いていたら、私の足は流血するわ。おやし趣味だもん、この子。

でも、一緒に行かなくちゃ、ダメだ。

一緒に行かないと、絶対ダメだ。

何でか分からないけど、いつも買い物なんて一人ですけど、女の買い物に付き合わせて嫌な思いをさせたくないからいつも一人だけど、

でも、今は、一緒に行かなくちゃダメなんだ。

「絶対だよ？絶対休みを取ってね？一緒に行こうね？」

彼のストライプのシャツを少し掴んで、あたしがお願いをすると、彼はそのハンサムな顔で優しく笑って、

右手であたしの頬を少し撫でながら言ってくれた。

「はい。わかりました。・・・一緒に行こうな。」

切ない、切ない、切ない。

胸が、そう言っている。

目が覚めた時、あたしの胸の中は文字通り泣いていた。でも、泣きながらも物凄く幸せだった。

本当に幸せで、もう一度続きを見たいと思った。でも、一度目が覚めると、あたしはダメ。

本物の目からは、チョツピリ涙が滲んでいるだけだった。

すごい幸せ。泣きたいけど、いい夢だったな。

そう思いながら、顔を洗いに行く。現実を直視したくなくて、鏡は見れなかった。メイクが面倒くさい。

先に服を着替えよう。明るい色は、なんだか気分が乗らない。カーキー色ぐらいで手を打とう。

こんな気持ちに負けていてはダメだ。頑張らなくちゃ。

やっぱりちゃんとメイクをしよう。やっぱり鏡は見たくないけど。誰か代わりにやってくれないかな？

こんなに気分が乗らなくても、ちゃんといつもの時間どおり食卓にはつくことが出来て、

お母さんがトーストや目玉焼き、フルーツなんかをお皿に乗せてくれていた。

「おはよう。今日は爽やかなー。布団も洗濯物も、スツキリと乾きそう。」

「おはよう。」

お母さん、今日は家事にまい進するんだな。夜、家に帰ってきたら、

「今日は疲れたー！もうダメ！」とか言いながらひっくりかえって
そう。

「ごちそうさん。」

お父さんがお茶碗とお箸を置く。お父さんは、朝のパンはダメな人
で、ほぼ毎朝お茶漬け。

最近年をとってきたせいかな、あたしより早起き。

「東北の方はまだ雨が残っているんだってね。気温もグツと下がっ
て、直樹なおき、大変だねえ。」

お母さんの言葉に、あたしは呆れる。

勤め人の若い男が、天気が悪いくらいで大変なもんか。

母親というものは、こんなに息子を溺愛するものなのかしら。嫁姑
問題は時代を超えるのね。怖いなあ。

いつも通りの満員電車で30分ほど揺られて、いつも通りの時間に
職場に着いた。

あたしは都内のデパートで契約社員をしている。紳士服売り場なの
で、午前中はお客が少ない。

だからみんな、割と心の余裕を持って(？)朝の支度をしている。

「おはようございます。」

半年前に転職してきた私は、売り場の中で一番の新人。

だから何かをしなくては、と思っただけで、いつも朝一番に来て

(っっていつでも他にも3人くらい朝一組がいるけど)

一人でロッカールームの机を拭いたり、流し台を拭いたりしている。
デパート勤務なんて生まれて初めてなので、他に何をしたいのか
分からなくて、

でも指示待ちをするほどの年齢でもないし、誰かにしつこく聞いて
回るのも悪い気がして、

馴れるまで、自分で仕事を見つけられるまでは、という思いで、この朝掃除を始めた。

それが今や、定着しつつある。あたしの居場所になりかかっている。

制服に着替える時、いつも通り携帯に目をやると、メールが一通来ていた。

それを開いて、それを読んで、あたしはしばらくポカンとした。なんだろう、これ。

一分ぐらいたって、ようやく、あたしは心当たりを思い出した。そして、息が止まった。

題名：今週土曜

休み取った。

10時ぐらいでいい？

有楽町駅のいつもの所で。

今、携帯の電波悪くってメールしか使えね。ごめん。

いつもは朝の夢の内容なんか忘れてしまう私が、今朝の夢は細かくはつきりと覚えている。

彼の笑顔を覚えている。色も、匂いもある夢だった。

でも、そんなバカなことがあるわけがない。

それにこれ、なんだかよく分からないメールだし、誰かが間違えて送ったものなのだろう。

誰が？あかし、男の人にメルアド教えていない。

そもそも差出人に、名前が表示されていない。

あたしはその、差出人のメルアドをじっと見て、一秒後には、再び息が止まった。顔が痺れてきた。
差出人のメルアドは、

あたしが半年前に解約した携帯の、メルアドだった。

あたしは頭が混乱してきた。

胸が痛いくらいドキドキとして、顔はもう何も感じないくらいに痺れてきた。

ショックのあまりに、吐き気がしてきた。

誰かが、あたしに嫌がらせをしている？そうとしか考えられない。

あたしの前のメルアド使って送って来るなんて、悪意があるとしたか
思えない。

なんだか今朝見た夢の内容を思い起こさせるけど、そんな訳が無い。
あり得ない。

それにこの文章だけでは、何も分からない。なんとでも取れる。
なにが言いたいの？

でも、誰かが、あたしに嫌がらせをしている。ショックを与えている。

この文章、この書き方。この雰囲気。舜を真似している。

一年前に死んだ、舜の真似をしている。

舜^{しゅん}は、一年前に死んだ。

交通事故で死んだ。

高速道路で死んだ。

居眠り事故だった。

最後に見た舜の顔が思い出される。

「じゃあね。」と言った時の、彼の顔。

あの時は気付かなかったけど、後から思えば、少し疲れた顔をしていた。

いや、あの時の彼は、いつも疲れた顔をしていた。

だけど私は、それに気付かなかった。

いや、ひよっとしたら気付いていたのに無意識で無視をしていたのかもかもしれない。

もうすぐ二人揃って連休が取れるから、一年ぶりに、一緒に海外旅行に行く予定だった。

ビーチリゾートで有名な島へ。

それに浮かれていた私は、彼の疲れた笑顔に大した注意を払わず、

旅行前のわずかな休みを有効的に使おうよ、と
彼を色々な所の買い物に付き合わせたのだった。

「結構買ったな、優希^{せいき}って。」
普段買い物に付き合ったことの無い彼は、少し驚いたように笑いながら、

旅行の準備にいそしむ私の後を、文句も言わずについてきてくれた。

だから、だから、だから。

私を家の近くまで車で送り届けた後。

彼はいつも通り高速道路に乗った。

そして、居眠りをした。

そして、故障をして路肩に止まっていたダンプカーに追突した。

そして、多分、自分が死んだ事にも気付かず天国に行った。即死だった。

そして、次に思い出すが、彼のお葬式の風景。
彼の顔は、とても事故で即死した人間とは思えないほど、綺麗だっ
た。

私の隣で寝ていた顔と、なんら変わりが無かった。

彼のお父さんが、私に近づいて挨拶をしてくれた。

彼のお姉さんが、私に気遣いの言葉までかけてくれた。

彼のお母さんは、私の方を一度も見なかった。

私も、彼のお母さんには近づけなかった。

文字通り、彼女から最愛の息子を奪った、女。

舜は、ハンサムで容姿端麗、身長180センチ以上、某有名大学卒
業、元バスケット部員、
仕事もそつなくこなし、性格も温厚、カラオケは右に出るもの無し、
という、

スーパーマンだった。職場の王子様だった。

そんな彼が、どうして平凡な容姿の平凡な短大出の平凡な私と付き合う気になったのか、わからない。

何と言っても、向こうから私に交際を申し込んできたのだから。

私は実年齢でも彼の二つ上である為、社内の年次は彼の4つ上の先輩だった。

だから一応、社内事務ぐらいは教えてあげれていたのだけど。

会社の飲み会の帰り道、たまたま同じ駅まで二人で歩いていた時、話が盛り上がっていた時、彼が私の手を握り、そのまま彼のコートポケットに入れて、私に言った。

「あつたかいでしょ？」

酔ってるの？この子？

身長155センチの私が驚いて彼を見上げると、

私より30センチ近く高い彼は、くせ毛の前髪の下にある大きな瞳で優しくそうに笑い、

その後すぐに、恥ずかしそうに顔をそらして言ってくれた。

「・・・川本さんの事が好きです。僕と、付き合ってください。」

私は、本当に驚いた。なんて直球勝負。いかにも彼らしい。でもも

ちろん、答えはYES。
だって私も、王子様に憧れている大勢の女子の一人だったのだから。
それどころか、彼に仕事を教えたりサポートしているうちに、
彼の笑顔やちよつとしたジョーク、いたずらっぽい表情に、
堪らなく恋をしていたのだから。

「やった！」

彼は私の手を放し、目の前でガッツポーズをした。

「うっしゃー!!」

そして私と目が合い、

「あ、やばい。もったいない、もったいない。」

と言って、再び私の手を握り、彼のコートのポケットに入れた。

「大事なモンだから。ポケットに入れとかないと。」

そう言って笑った彼の瞳は、同僚の女の子達が見たら目眩がするだ
ろうなっ、っていうくらい
綺麗だった。

その瞳が、私の前で閉じられて、お葬式の彼の顔に変わる。
あの綺麗な、死に顔。

メールを開いたまま、私の顔は痺れたまま。
胸が痛すぎて、なんでか右手の小指が痛い。

これは、あり得ない冗談。してはいけない冗談。
誰かが舜のふりをしている。舜を装っている。
しかもタチの悪い事に、私の以前のメルアドを使っている。前の、
携帯のメルアド。

私はそれを、半年前に解約していた。
あの事故の日以来、どこかに無くした携帯。
そもそも無くした携帯を捜す気力なくなってくつて、気付いたら何力
月もたっていて、
しようがないからやっと、解約手続きを終えた携帯。

機種変更なんかしなかった。どこかで過去を断ち切りたくつて、全
然違う所で新規契約をした。
新しい携帯の番号とメルアドは、家族と数人の女友達しか知らない。

それを、このメールの送信主は、知っている。
どういう手段を使ったのかは分からないけど、私のメルアドを知っている。

送信相手を間違えたのかもしれない。（私のメルアドに？）

別に舜のフリをしている訳ではないのかもしれない。（この文体が女の子から？）

私が覚えていないだけで、誰かと今週末に会う約束をしていたのかもしれない。

（まったく心当たりがないけれど？・・・私の前のメルアド取得して？）

呼吸が苦しくなってきた、涙も出てきて、とてもこれから仕事どころではなくなってきたぞう。

でも、ダメ。負けちゃ、ダメ。

舜の事で、自分がダメになっちゃ、ダメ。

そう決めたじゃない。

だって、あたしは生きているけど、舜はもう、生きていない。
生きていたかったらうに、生きていない。

舜が受けたであろう悲しみや無念さ以上を、私は受けていない。

だから、そんな私がここで負けるなんて、甘いんだ。
舜に、申し訳が立たないんだ。

甘えったれてちゃ、ダメだ。ふらふらするな。
しっかりしろ、優希。

まずは仕事。前を向いて。

心機一転するために転職した、新しい仕事。キッチンとしなくては。
契約社員が、この歳で、甘えた事は許されないのは分かっている。
気分が悪くなりました、なんて言ったら、明日から来なくていいよ
と言われても文句は言えない。

私は携帯を睨んだ。

こんな奴に、負けない。

私は負けないんだから。

私のメールアドレス使っなんて、なんて卑怯な奴。

あんに、私は支配されない！

私は、そのメールに返信をした。

題名：Re：今週土曜日

本文

誰？

ふざけんな！！

「なにこれ。すっげ、恐いんだけど。」

舜しゅんがチョッピリ怒ったような声を出し、
あたしより身長が30センチも高いくせにどうやるのか、少し拗ね
たような上目使いであたしを見ながら
あたしに携帯の画面を見せた。

拗ねてる顔もなんて可愛かつこいいんだろう、
なんて思いながら、差し出された携帯の画面を見て、あたしはびっ
くりした。

「……え……!!え、だつて、これ……」
「……あれ、舜からだつたの!？」

画面には、あたしからの怒りのメール

『誰。ふざけんな!!』が表示されてる。

「優希ゆうきつて、怒るとこえーのな。こんな、なるんだ？」

彼は面白そうにニヤニヤと笑つて、私を見下ろしている。
腕を組んで、あごに手をやり、休日スタイルの長めのくせっ毛の前
髪を揺らして、こつちをみている。
彼の大きな瞳は、やっぱり綺麗だ。

「え・・・、あ、だって、ほら、あの、変な人から来たのかと思っ
たし、そしたら、あの、

・・・付きまとわれたら困るって思ったし・・・。」

一瞬、ちよつと恥ずかしくなって、彼の胸のあたりに目を反らしか
かった。

だってあたしは普段、あんな乱暴な言葉使いはしない。

・・・親しい女友達同志だったら、時々は使うかもしれないけど・
・。

そして慌てて、反らしかかった眼を、舜の顔に戻す。

眼を、反らす事がもつたいない。出来るだけ、見ておきたい。
見れるうちに、見ておきたい。

「わかってるよ。冗談、冗談。」

俺、優希のそついう、普段は柔らかかくて明るくて可愛いけど、
いざとなったらビシッと立ち向かうところ、好きだから。」

可愛い。好きだから。

彼に面と向かって言われて、その大きな瞳に見つめられて、あたし

はドキンとした。

そんな事、面と向かって言われた事、ない。

彼は少し恥ずかしそうに下を向いて、手にした携帯をいじりながら、クスクス笑って言った。

「でもなー。せつかく彼氏が誘ってるのにさ。警戒されるなんて、いくら俺の仕事が忙しかった、

言ってもなー。忘れられてる？俺って？」

「そんなこと……って、それ！その携帯！何それ！？」

あたしは弁解するのも忘れて、舜が持っている携帯に飛びついた。舜は携帯ごと手をあたしに掴まれて、呆気にとられた様子だった。

「これ、何？どうして舜が持つてるの？どういうこと？？」

携帯ごと舜の手を握って、ガバツと彼の彼の顔を仰ぐと、

彼は一瞬あたしの勢いに押されていたが、やがて少し、バツの悪そうな顔をして瞳を横にずらした。

「え……ごめん……ちょ……なんか、ヤバイ？」

仕事の時はそうでもないんだけど、私といる時はすぐに謝るのは彼の癖だ。

以前にそれを突っ込んだら、「……惚れた弱みってヤツ……？」

と顔を真っ赤にしながら反らされた覚えがある。

「これ、さ……拾ったんだ。」

「拾ったあああ？」

「いや、拾ったつーか、貰った？みたいなの？」

「貰ったあああ？携帯を？どう言う事？」

普通、拾ったり貰った携帯を使う？なんて考えながら、心の片隅で認識する。

だって、この世界は、普通じゃない。

彼は少し困ったように遠くの方を見つめて、ちょっと間を置いてから、言った。

「俺、さ。一人で歩いていたんだ。……なんか、困ってさ。」

優希に連絡を取りたかったんだけど、何もなくて。

そうしたら、近くに、……男の子が二人、近づいてきたんだ。

その子達が、『お兄ちゃん、この電話、使えば？』って。」

そう言って、二人の手の中の、ピンクシルバーの携帯を眺める。

あたしはなんとなく、状況が読めてきた気がした。

「……男の子？」

「うん。5歳くらい？と……3歳くらい？なんか、とにかくうちやい子。」

あたしは彼の顔を見上げて、その綺麗な瞳を覗き込んで、思いきって聞いた。

「舜・・・ここに来る前、あなたはどこにいたの？」

すると彼はすこしビックリしたようにあたしを見つめ、そして当り前のように言ったのだった。

「ここに来る前はちょっと散歩したけど・・・さっき、優希と出かけたばかりじゃなか。

行ったじゃん、買い物に。家の方まで送り届けただろ。」

あたしも、彼を見つめた。そして直感した。

彼の中では、あの事故以来、時が止まっているんだ。

「どのくらい散歩してたの？」

「？さあ？そんなしてねーよ？・・・多分・・・10分くらい・・・？いや、・・・一時間かも。」

「・・・あれ？もっとかな？いや、でも、そんな歩いてない気もするし。」

言いながら、彼は少し困惑しているように見えた。

彼は困ったままあたしを見て、困ったまま言った。

「そしたら、優希に会った。水着買い忘れたっつーから、買いに行

く約束、したる？

会社の休み、取らなきゃなって思って、・・・取れたと思って・・・あれ？

とにかく取れたと思ったから、メールしたんだけど・・・。」

少し眉間にしわを寄せて、彼はあたしを見た。

「俺、なんか変？」

あたしは泣きたくなかった。我慢しても、我慢しても、涙が溢れてきた。

それでも頑張つて、彼の顔を見詰めたまま、涙もぬぐえないまま、彼の綺麗な顔を両手で包みこみ、彼の顔をそつと引き寄せた。

彼はその長身をかがめて、あたしの両手にあわせてゆっくりと近づいてきて

あたしと彼は、額をコツンと重ねた。

舜は今、迷っている。迷子になっている。

自分の状況がよく理解できなくて、少し当惑している。

当たり前だよ。だって、眠っている間の出来事だったんだもの。

あたしは言葉を選びながら、涙を流しながら、微笑みながら、言った。

「舜はね、あの日、あたしを家まで送ってくれた後、いつも通り高速に乗ったの。」

そしてね、いつも通り帰っていたんだけど、・・・眠っちゃったの。」

ごめんね。仕事であんなに疲れているのが分かっていたのに、あたし、無理させちゃったね。」

振り回しちゃったね。」

それで舜は眠っちゃって、・・・それで・・・それで・・・。」

息が詰まる。言葉が続かない。彼の頬を包んでいるあたしの両手が震えている。

彼は黙って聞いていて、しばらくしてら、低い、少しかすれた声であたしに聞いた。

「俺・・・死んじゃったの？」

言葉が出ない。体が震える。喉が詰まって、痛い。

それでもあたしは、彼の瞳から目をそらさなくって、そらせなくって、ただ見つめたまま泣き続けた。

やっと思いで、小さく頷けた。

それが、舜に対する、最低限の責任だと思って。

「・・・そっか・・・。」

彼はしばらくしてから、あたしの両手をそつとはずし、自分の両手で握ってくれてから姿勢をおこし、前方を見つめながら、また呟いた。

「……そつか。」

そのまま、じつと動かず無表情な舜に、あたしは声がかけれなかった。

しばらくして、彼はあたしを見た。その顔は何と、少し笑っていた。寂しそうな、切なそうな、でも柔らかい笑顔だった。

「……なんか、しょうがねえな、俺って。みつともないな、全く。かつこわりい。」

居眠り運転で死ぬなんて、ほんと、マヌケ。」

そして、少し俯いて言った。

「なんか、納得。なんでか分からないけど……なんか……そうかあ、って感じ。」

それからハツとしたように顔をあげてあたしを見た。

「まさか俺、誰かを巻き添えにしたんじゃないやあ……。」

「あー、それはないよ。大丈夫。……止まっているダンプの後ろに突っ込んだから。」

……運転手さんも、怪我ないし……。」

彼はホツとしたように肩を下ろすと、その後には眉を下げて情けなさそうに言った。

「それはよかった・・・っていうか、まあ、なんというか、マジだけど・・・俺、マジかつこわりい。」

人生最後が、それかよー。居眠り事故なんて、24で、どんだけ眠いんだって。

もつと仕事サボったときゃよかったなー。

・・・ねえ、その事故って、いつ？昨日？」

あたしはドキンとした。

この子の中では、時間が止まっているのかもしれない。

「・・・一年前だよ。」

舜はポカン・・・として、それから言った。

「どんだけ眠いんだよ、俺・・・。」

「・・・ゆつくり、寝れた・・・？」

「・・・うん・・・多分。もう、眠くない・・・。」

それから彼はあたしの髪を撫でて、少し沈んだ声で言った。

「ごめん・・・。グアムも、行けなかったな。」

あたしは思わず笑ってしまった。

「え？それを今言う？グアムなんて・・・これから、どこでも行けるじゃない。モルジブだって。」

「え？何で？」

ビツクリして、大きな目を更に大きく見開いた彼の顔に笑っちゃいながら、あたしは言った。

「だって、今、こうして会えてるじゃない。これ、あたしの夢だもん。」

どこへでも連れてってあげるよー、あたし。」

「えー！？これ、優希の夢なのー！？」

「そうだよー。じゃなきゃ、こんなに喋れないじゃんー。舜の夢、リアルに見れて、超嬉しい。」

「・・・まあ、この携帯は、リアルすぎるけど。」

「これって優希の夢、なんだ？この世界って、そういうモノなんだ？」

ポカーンとして呟いていた彼は、あたしの視線に気づいて、その先にある、

彼が手にしたピンクシルバーの携帯に目を落とした。

「何？この携帯？なんで？」

「だってこれ、私の前の携帯だもん。道理でなあ、あのメール。」

舜があたしの携帯を拾ったなんて、願望が思いつきり反映されているなあ。いい夢だ。」

「へえー。これ、優希の携帯だったんだ。道理で、なんか見た事あると思っただ。」

「でしょ？あたしも、自分の昔のメルアドからメールが来て、びっくりしたよ。」

「・・・それも、優希の、夢の話？」

あたしは少し言葉に詰まった。

解決できていない、現実の問題を思い出したのだ。

そうだ、いくら夢の中で思い通りにセッティングしても、現実とは別。

「……ううん、ほんとの話……。」

すると彼はジッとあたしを見た。

「それ、いつ？」

「んーと……今朝、かな？」

「それって、俺がさっき、優希と会った後？俺が送ったメールの事？」

舜と話がかみ合わない。

それは、そうだ。だってこの夢の中では、あのメールは舜が送った事になっているのだから。

拾った、昔の私の携帯を使って。
なんてご都合主義。

「……そうだよ……。」

あたしは少し俯いたが、彼はそんなあたしの様子にはさほど気に留めず、

じーっとその携帯を見つめていた。

「……そうか……使えるんだ、このケータイ……。」

「何？電話でもかけてくれるの？」

「かけられないんだよ。言ったじゃん、なんでか知らないけど、電話の調子は悪いんだって。」

彼はそう言っつて、その二つ折りの携帯をパカツと開いた。

「それにほら、アンテナが立ってないんだ、ここっつて。」

見ると、確かにアンテナが立ってない。

「へー、アンテナいらすなんだー。便利だねえ。」

「なんだ、そりゃ。」

彼はクスツと笑っつて、あたしの肩を抱き寄せた。

「ここが、天国でも夢でも、どっちでもいいや。優希をこうやって抱けるんだもんな。」

考えてみりゃ、人生最後に会った人間が優希っつていうのも、なんだかいね。」

泣けばいいんだか、笑っつていいんだか、わからない。受け入れるの、早くない？

そうか、一年間も眠っつていた子なんだから、基本的に呑気なのかもしれない。そういうもの？

その時、何故だか、お葬式で泣き続けてあたしと目を合わさなかつた、舜のお母さんを思い出した。

「お母さんにも、会えた？」

彼はキヨトンとあたしを見た。

「母親？・・・いや、まだ優希にしか、会ってない。だってこれ、優希の夢だろ？」

俺、そんなに色々な人に会えるの？」

え？何、そんなの知らないよー。そこまで設定考えてないよー。どうしよう、今想像して、彼のお母さんを登場させるべきかしら？

「そんな、びつくりするなよ。ちょっとからかってみただけ。」

「舜って・・・順応力、あるね・・・。死んだ、とか、夢、とか・・・。」

「ん。俺ってあんまり物事こだわらないタチだから。」

彼は少し笑った後、身をかがめてあたしの顔を覗き込んだ。

「・・・俺の母親に、なんか、言われた？」

その綺麗で真剣な眼差しをしばらく見つめた後、あたしは黙って首を横に振る。

「ほんとに？なんも？」

「・・・なんにも。本当に・・・本当に・・・一言も。」

彼はその様子をジッと見てから、そっか、と小さく呟いた。そして身をおこして言った。

「母親にも会ってみるよ。ごめんな。きっと辛い思い、させたんだよな。・・・俺のせいで・・・。」
「舜に謝って欲しいんじゃない!!！」

あたしは気がつくのと、反射的に叫んでいた。自分でも少しビクッリしていた。

「謝ってほしくって、夢の中に出したんじゃない!!私、私がかいたくって・・・。」
「会いたくって・・・謝りたくって・・・ごめんなさいって・・・。」

泣けてくる。涙が出てくる。泣きたくないのに、止まらない。こんなに泣いたら、彼はきつと自分を責める。そういう子だから。

舜は、あたしを腕の中にそっと抱き寄せて、かすれた声で囁いた。
「優希は、悪くない。」
「舜も、悪くない。」
あたしも涙で詰まった声で、囁いた。

しばらく二人で抱き合っていたら、彼が急に顔をあげた。

「あれ?誰か呼んでる。」
「え?」

あたしも顔を上げると、彼が少し上方の周りを見渡しながら、言った。

「ほら、誰かが呼んでる。」

「誰を？舜を？」

「違うよ。優希を呼んでる。」

え？と思つて耳を澄ますけど、あたしには聞こえない。

「誰？聞こえないよ？」

「聞こえるよ、ほら。」

聞こえない。聞こえるのは、変な騒音だけ。どこかでサイレンが聞こえる。

「ほら、呼ばれてるよ。そろそろじゃね？・・・またな。次はモルジブに呼んでよ。出来るんでしょ？」

彼の悪戯っぽい、クスツとした笑顔。それを見ながら、

あたしは徐々に目が覚めていった。
なんて、素晴らしい夢。

起きたら、凄く疲れていた。

何、あの、ディテールに凝った、しかもご都合主義の夢は？・・・
夢としては、完璧ね。

全然寝た気がしない。気力を使い果たした。

・・・幸せな夢だから、ストレスはあんまりなくっていいんだけど
ね。

目覚まし時計を止めて、ベッドから這い出る。あー、なんだか朝からテンパった気分。

あたしの都合に曲げたシチュエーションで、舜に「君は悪くない」
なんて事まで言わせて、

なんだかかえって罪の意識を感じてきたわ。

段々頭が覚醒してきて、自己嫌悪に陥りそう・・・。

とりあえず顔を洗ってこよう。

そう思って立ちあがったら、鞆が視界に入ってきた。

あの中には、携帯が入っている。あの、メールを受信した、携帯。

昨日はあの後、結局ほとんど仕事にならなかった。

形だけに動く事は出来ても、あたしの表情を見たほとんどの人が

「川本さん、具合が悪いの？」

と聞いてきた。

実際具合が悪くなったのだけど、そんな甘えた事を言いたくなくて、なにより訳の分からない奴に負けたくなくて、必死でそれなりに頑張ってたら、

優しいパートのおばちゃんが気を使ってくれて、接客から棚卸の手伝いにまわしてくれたのだ。

他人に会わずに済んで、正直ホッとした。

他人の優しさに、とつてもホッとした。

あのメールにはタンカを切って返信したものの、その後を待つのが怖く、

結局朝からずっと、電源を切りっぱなしだった。

あれ、返信が来たのかな？

それともただのいたずらで、相手はたいして気にも留めていないのかな？

それとも変な奴に引っかけって、更に泥沼にはまっていたりして・・・。

あたしはちょっと考えてから、鞆から携帯を出し、しばらくそれを見つめて、

意を決して電源を入れた。

するとすぐに、未読メール1通、を受信した。

胸が、ドキン、と飛び上がる。

キタ。奴からだ。

フォルダをあけて、更に胸が跳ね上がった。

あの、メルアドからだった。私の前の携帯のメルアド。

思いきって、それを開く。

そして、あたしの時は止まった。

RE：土曜日

本文

優希は悪くない。
モルジブいいね。

四

まだ夢の続きをみているような気分だった。

でもどうやら現実だ、現実と言ふ事にしておこう。後で目が覚めるかもしれないけど。

あたしはしばらく画面を眺めた後、気を取り直して返信を打った。

題名 Re：土曜日

本文

何の事？

他に思いつかなかった。

送信主が誰か知りたい、だけど下手にこちらから聞く訳にもいかない。それにこのメールの内容。

誰でも書ける気がするけど、「モルジブ」って、何？

あたし、誰かにモルジブの話でもした？まったく記憶にないんだけど。

よもや、誰かがあたしの夢の内容をしっているとは思えない。

・・・よもや、舜^{しゅん}が向こうの世界からメールを打っているとは思えない。

ところが、この返信メールが送れなかった。

宛先不明で戻ってきたのだ。

あたしはびっくりした。だって、昨日は送れたじゃない。

2、3度試したが、その度に戻って来る。

・・・おかしい。あたし、相手先のメールアドレスを知らない間にいじった？

あたしは受信フォルダを開いた。メールアドレスを確認するために。

ところが、このメールが消えていた。

受信フォルダから消えていた。

今日のメールも。昨日のメールも。

「優希^{ゆしき}、具合が悪そうに見えるけど大丈夫？」

食卓でお母さんが、少し心配そうに聞いてきた。

「ほんと？そう見える？大丈夫だよ。具合は悪くない。・・・ちよ

つと、気になる事があるだけ。」

「そう……。昨日もデパートから早く帰ってきたわりには疲れて見えたから、

体調が悪いのかなって思った。」

お母さんは、あたしの勤め先を「会社」と言わずに「デパート」と言う。確かにそうなんだけど。

「ごちそうさん。」

斜め前に座っていたお父さんが、箸を茶碗の上に置き、いつものように立ち上がって部屋を出ていった。

洗面所に行って歯を磨いて、の支度をするのだろう。

お父さんが出ていったのを見届けて、お母さんはあたしの真向かいに座った。

両肘をつけてあたしを見る。

その机の上に、おかあさんの朝食はない。なんだろう？なんか、あたしに話？

あたしはミルクティーを飲みながら、なんとなくお母さんを見た。

お母さんも私を見続けている。

な……。なんか気まずい。何かしら？

するとお母さんは、困ったような笑ったような緊張したような、なんと形容しがたい表情をつくった。

「……。もうすぐ、本多君の一周忌よね。」

ああ、それが。

「うん。そうだね。」

「今週の……。確か、土曜日よね。」

「……。うん？」

舜の命日が、一周忌がいつか、なんて忘れた事はなかった。それが土曜日な事も知っていた。もうすぐで、今週だったこともわかっていた。

なのに今、急に頭の中で繋がるものがあった。

あたしはミルクティーを口に付けたまま固まった。

今週の土曜日！！！

あたしがしばらく動かないので、お母さんは言葉を続けた。

「優希の、したいようにやって、お母さん、必要ならどこでも付いて行くよ。」

あたしは舜のお通夜とお葬式には出たけど、初七日と四十九日には行かなかった。

実際、後の二つには呼ばれなかった。

初七日は省略する家も多い、と後で知ったけど、本多家がどうしたのかは知らないし、

四十九日は、省く事はないと思う。きっとどこかで行ったのだろう。

あたしだって、行く気があるなら、ちゃんと先方に電話して聞くなりすれば済む話なのだが、それをしなかった。出来なかった。

あたしを送り届けた後に、死んだ舜。
疲れて、居眠り事故で死んだ舜。

皆の空気があたしに刺さる気がした。
あの子のせいで舜が死んだ。あの子のせいで舜が死んだ。
恋人が死んで、可哀そうに。恋人が自分のせいで死んで、さぞ地獄
を見ているだろうに。
恋人が死んでも、あれだけ若ければ、きっといつか、違う人と結婚
するよね。

人それぞれ、思う事はそれぞれ、
でも皆が、あたしの事を見ているのは確か。あたしの事を色々考
えて、言っているのは確か。

それに耐えられなくて四十九日にも顔を出さず、舜と昔一緒だった
職場もやめた。

お母さんは、あたしが一周忌の事で悩んでいると思ったのだろう。もしあたしが一周忌に顔を出したくて、でも出しづらいなら、自分も一緒についていく、
と言ってくれているのだ。

でも、申し訳ない事に、あたしがその時考えていたのは別の事、あのメールと今朝と昨日の夢の事だった。

舜が、あたしと待ち合わせをしようと言ってきたのも、今週の土曜日だった。

何かが、あたしも気付かない何かが、シグゾーパーズルのピースのようにはまった気がした。

でも、そんな事であるかしら。

今まで、どんなに泣いても願っても、舜が出て来てくれる事はなかったのに。

(そりゃそうか。眠っていたんだものね、あの子。)

「・・・あのさあ・・・しゅ・・・本多君って、今、どこにいると思っ?」

「・・・え?」

「今、ちゃんと天国にいるかなあ。」

「・・・いるんじゃないのかな? いい子だったんでしょ? 穏やかで、優しくて。」

お母さんには、舜を紹介した事がなかった。

でも、時々あたしが話を聞かせていた。ほぼ、自慢話だったけど。

「うん……。それがね、ちょっと呑気な所がある子だったから・
・今、起きたらしいの。」

「え?」

「ずーと眠っていてね、あのまま眠っていて、今起きたらしいの。」
「……………あらあ……………」

お母さんはさすがに随分驚いたようで、どう言ったらよいのか分からない、という表情をしている。

「それで、最近あたしの夢に出てきて、ケータイにメールしてくる。
……………って言ったら、お母さん、信じる?」

「……………ケータイ?」

「そう。普通の、現実の、本物の携帯。でもそのメール、すぐ消え
ちゃうんだけど。」

「……………あら、まあ。」

お母さんは、霊とかオカルトとかを絶対的に信じない人で、科学的
根拠が無い話はまるつきり
相手にしない。

柔らかなそんな雰囲気を持った人なんだけど、すごい現実主義の人だ。
だからこそ、そんな人に話を聞いてもらいたかったのかもしれない。
単純に、意見を聞きたかった。

「夢に出てきて、メールもくれるの?」

「うん、そう。メールで夢の続きの話をするの。そのメール、すぐ

それなら、無視するか、・・・喧嘩しようかと思っていた。」

自分で言っ、自分で笑ってしまった。喧嘩しようと思っていたんだ、あたし。

「・・・でも、本当に『本多君』のメールだとしたら・・・。」

考えていたら、思うより先に言葉が出た。

「彼には、ちゃんと天国に行ってほしいな。いつまでも、ここにいやいけないんだと思うな。」

きつと・・・そう・・・。」

お母さんは、それをじつと聞いていた。
あたしは、じつと黙ってしまった。

「・・・お母さんね、天国とかあの世って信じてないの。
人間って、死んだら何にもなくなるものだと思うている。土に還って、ね。」

お母さんはあたしの隣の空間を見ながら話し始めた。

「でも、新潟のおばあちゃんが亡くなった時、天国で幸せにやってほしいって思った。

信じてないけど、そう願ったのね。

・・・天国って多分、生きている人達のためにあるんだと思う。

生きている人達が、亡くなった人たちに思いを馳せる時、天国やあの世を思い浮かべるのね。

幸せでいてほしいって。」

そして困ったようにあたしを見た。

「優希に何が起こったのか、本多君とどうしたのか、残念ながらお母さんには分からないのだけど、

優希が現実を受け入れて、それでも人生を前に向いて進んでいこうとしているのは、わかる。」

あたしの手をそっと握って、お母さんは微笑んだ。

「本多君をとても大切に思っているのね。優希は強い子だわ。」

何があっても、優希が何をして、お母さんは優希の味方だから。」

舜が死んだ後、両親とじっくり話した事はなかった。お互いなんとなく避けていた。

今、正面からお母さんの話を聞いて、あたしは少し胸が熱くなった。昔は随分反抗したけど、やっぱりお母さんだな・・・。

・・・あれ？

「・・・それはつまり・・・あたしの言う事を、信じていない、と・・・？」

「言う事？どれ？」

「夢、とか、メール、とか。」

「ああ。わからないわよ。だってお母さんが体験したわけじゃないもん。」

あたしの手を握ったまま、しれつと言う。

そうだ、こういう人だった。自分が見た聞いた体験した事以外は、信じない人だった。

科学的根拠が大好きな人だった。

「だって、舜がいい人だから天国にいるだろうって言ったじゃん。」
「そうねえ。悩んでいそうな娘に、あんまりシビアな事を言っても、ねえ。」

にっこりと笑うお母さんに、何故だか心の軽くなった自分があるのは、やっぱり娘だからなのね。
あたしにもにっこりと笑って、心の中でこう答える。

やっぱり、舜なんだよ。そう思う事にした。
もう、メールは消えてしまって、確かめようがないけど。

あたしが、彼に天国をおしえてあげなくちゃ。
今週土曜日までに。

今日は木曜日。

五

今晚も夢の中で舜しゅんに会えるかも。

そう思うと神経が高ぶって、なかなか眠れないに決まっている。

あたしは日中動き回ってとにかく働きまくり、眠くなりそうな風邪薬を沢山飲んだ。

睡眠薬なんてどこで手に入るか分からなかったし、なんとなく抵抗があるけど、

風邪薬なら薬局で簡単に買える。おまけにあたしは、薬が効きやすいタイプ。

それでも夜中の2時過ぎまでは、時計を見ていた記憶がある。

「メールが返信できなかったよ。舜にもらったメールも、消えちゃった。」

あたしがそう言つと、舜はまるで日常の事を話すかのように当り前に言った。

「そうなんだよな。なんか、俺のケータイも調子が悪くって。」

「それ、あたしの携帯。」

「あ、そっか。」

ピンクシルバーの携帯を取り出し、パカッと開くと画面を見ながら彼は言った。

「もちつとまともな文章打ちたかったんだけどさ、うまくいかねーんだ。中々送信できなかつたし。」

「充電切れ」かな？と笑う彼に、一年前に無くした携帯なんだもの、充電がもった方が不思議、
と思ってしまう。切れてもしょうがないかも、って。

「ここ、モルジブじゃなくね？それともこれが、優希ゆうきさんのモルジブ？」

舜がいたずらっぽく笑った。

確かにここはモルジブでは、ない。なんだか色の無い広い空間なのに、なんだか人が沢山いるような気がする。

それだけ。

モルジブ・・・そういえば口で言うだけで、写真で見た事すらなかったな。どんな景色なんだろう。

分からないのに、夢で出せる訳が無い。

もとよりモルジブの事なんて、今日一日、頭からすっかり消えてい

た。

「なんか・・・今日は、人が多いね。」

あたしがなんとなくあたりを見回すと、舜もつられてあたりを見回した。

「そうか？はじめっから、こんなだったぜ？」

そうなんだ？全然気がつかなかった。

「ここって、どこなんだろ？みんな、何をしているんだろ？」

「優希の夢なんじゃなかったの？みんな優希の知り合い？」

・・・冗談だよ。そんな困った顔、するなつて。

・・・そうだな・・・多分・・・優希の夢だけど、俺がいる世界、でもあるのかも。」

「・・・それって、あたしの夢が、あつちの世界とつながってるって事？」

「知らないよー、俺、経済学部出身だもん。不思議知識、ゼロ。こ
ういうの、女の子の方が

詳しいんじゃないの？教えてよ？文学部だっけ？」

「英文科。シエークスパしか習ってないから。」

こんな所で、何話してるんだろ、あたしたち。思わず二人でクスクス笑ってしまう。

「なんか・・・みんな、どっかに急いでいるみたいなんだ。

独り言言ったり、笑ったり、泣いたり、怒ったり、嬉しそうだったり、色んな人がいるんだけど、

・・・あ、よく見てみるよ、外人ばっかなんだぜ？日本人とか、あんま見ないのな。

だけどなんでか、言葉はなんとなくわかるみたいなんだよなあ。不思議だろ？

・・・みんなどっかに向かっているみたいなんだ。」

舜に言われて、あたしは周りを観察した。

ところが、あたしには分からない。人が沢山いるんだろうな、っていう事はわかってても、

その人たちが外人なのかどうか、どんな表情をしているのか、すら分からない。

・・・ただ、人のざわめきを、感じるだけ。

舜は、柔らかかそうな唇を（実際、柔らかいんだけど）少しすぼめるようにして、

それを左手で軽く覆うような仕草をして、遠くを見るような表情をして、言った。

「俺も、そのうち、そっちへ行かないといけないんだろっな……。」

「

あたしが、彼を説得する必要は、ないみたい。

彼は、ちゃんと分かっている。自分が行く場所を。やっぱり、頭がよくって、物わかりのいい人だ。

183センチの身長、すらっとした体型、少しくせつ毛の長めの前髪、女の子顔負けの長い睫毛と大きな瞳

頭脳明晰、スポーツ万能、歌声も最高（カラオケで、その場にいた女の子達がみんな、オチた。）

でも、なにより、優しくって穏やかで、少し悪戯っ子な所があって、チヨッピリおやし趣味のある、

年下の、素敵なあたしの王子様。

「何？……あ、見とれてる？」

あたしの泣きそうな視線に気づいた彼が、ニヤツと茶化した。

「……うん。見とれてる。」

素直にそう答えると、彼はすごく切なそうな顔になった。そつとあたしの顔に触れる。

「俺も、優希に見とれてる……。」

あたしはその手をそつと握り、彼を見上げた。涙がついに、ポロッと流れた。

「……大好き……。」

いかないで……と言いたくなって、グツと堪えた。

あたしのお願いは何でも聞いてくれた舜に「いかないで」なんて言ったら、舜は本当に「迷って」しまう。

そんなの、いいわけがない。

あたしは言葉を飲み込んで、結局同じ言葉しか言えなかった。

「……大好き……。本当に、大好きなの。……大好きなの……。」

次の瞬間、舜はあたしを強く抱きしめた。
夢なのに、彼の匂いがした。

「ごめん……本当に、ごめん……嫌な思いをさせて、ごめん……つらい思いをさせて、

ごめん……。俺がもっと、ちゃんとしていれば……」

あたしはついに、彼の腕の中で泣きだした。こんな事が出来るのも、これが最後だろうな、って思いながら。

この胸を、手放したくないな、って思いながら。

大好き。大好き。大好き。本当に、愛してる。

「ごめんね、舜……仕事で疲れているのに、我儘言っ
て。沢山疲れさせちゃって。」

あんなに疲れていたのに、外に連れ出しちゃって。」

泣きながらあたしが言うと、彼はあたしを抱きしめたまま、あたしの頭を何度も撫でながら言った。

「優希のせいじゃないだろ。優希は何一つ悪くないだろ。みっともない事をした、俺の責任だよ。」

俺は優希に会った方が、疲れが取れたんだ。

頼むから、自分を責めないでくれよ。・・・頼むから・・・。」

舜はあたしの頭顔をつけて、かすれた声を震わせて言った。あたしはもっと胸が痛んだ。

死んでしまった人間に、あたしは何で気を使わせているんだろう。

死んで、無念で、悔しいのは、舜本人なのに！

舜は、ちっともそこを口に出さない。あたしの前では、何も言わない。

・・・あたしの事しか、話さない・・・!!!

なんて、優しい人。

死んでまで、なんて優しい人。

優しく愛おしい、あたしの王子様。

こんな人には、もう二度と会えない。

彼の心残りの一つに「あたし」があるんだとしたら、
あたしはそれを取り除かねばならない。
あたしは舜の、足かせになつては、いけない。
舜の足を引つ張つちゃ、いけないんだ。

あたしは彼の胸から顔を上げると、涙でぐちゃぐちゃになつた顔で
彼を見据えた。

「あたしは！不幸になんか、ならない！！舜のせいで、不幸になつ
たりなんか、しない！！」

舜と付き合つた2年間は、夢のように幸せだった。最後の最後ま
で、幸せだった。

だから、あたしは不幸なんかじゃ、ない！あたしは、舜のせいで、
舜のせいで……！！」

胸から込み上げてくるものがあつて、喉が痛くなつて、言葉がつま
つた。

「……幸せなんだから！！」

舜は、大きな瞳を赤くしながらあたしの顔を両手で包みこみ、あた
しの涙をその親指で、何度も何度もぬぐってくれた。
そして、言った。

「……ありがとう。」

こちらこそ、ありがとう。

彼は少し顔を反らして、腕で自分の涙を軽く拭くと、あたしに冗談っぽく笑いかけた。

「俺のせいで結婚出来ない、とか、無しな？」

「……舜のせいで独身、だったりしないし、舜のせいで結婚、とかもしない。ちゃんと自分で決める。」

「向井君、だっけ？いいよ、彼でも。」

俳優の向井君は、かつこよくてあたしのお気に入りって事を彼は知っている。

ちよっと、からかわれた。思わず笑ってしまう。

「じゃあ、子供が出来たら、『舜』って付けようかな。」

「え？マジ？それは勘弁。」

彼はギョツとしたように、少しふざけてあたしを見た。

「絶対、乳離れ遅くなるぜ、そいつ。いくつになっても母親と寝たがって、あームリムリ。」

生まれ出てくる時、なんかこの道見た事あるな、とか思ってたら、どうすんだよ?」

あたしは何の事かわからずポカン・・・として、次の瞬間、顔が真っ赤になった。

「バツ・・・何、言ってるの!!」

「あははー。冗談、冗談。」

彼はさも愉快そうに笑った後、あたしの髪を優しく撫でながら言った。

「でも、そんな事、すんなよ?旦那に悪いだろ?死んだ元カレの名前だなんて。」

それで家庭不和になっても、俺は助けてやれねーよ。」

「舜って・・・死んでるくせに、なんて現実的・・・。」

「そう?常識的って言って。」

「常識的・・・この非常識なシチュエーションで・・・。」

二人で顔を見合わせ、プツと嘔き出してしまった。デートの時、よくこうやって笑ってた。

「じゃあ、ペットくらいにしておこうかな？」

「やめろよー、頼むから。心の思い出しにしまっというて。」

ふざけ合っていると、舜が急に顔をあげて前方を見た。

「どづしたの？」

「いや……。ほら、見える？あそこにいる、小さな男の子二人。」

舜の指さす方を振り返って私も見たが、その遠くには小さな子供がいるだろうけど、それが男の子二人かまでは分からない。この世界では、舜の視力が著しくいいのか、あたしの視力が落ちてるのか。

「あの子たち、俺に携帯見つけてくれた子たち。」

そう言って、そっちに向かって軽く手を振る。

「俺を、待っていてくれてるのかな？」

「え？」

「あのさ、俺の持ち物って今、誰が持っているのかな？」

「え？」

突然の話題転換。

「寮にあった荷物の事？」

「うん。そうそう。」

「・・・多分、ほとんど、舜の実家にあるんだと思うよ。」

「そうか。俺の小さなナイロンジッパーの入れ物があるんだけどさ。その中に、デジカメのメモリーカードがいくつか入ってるの。」

「・・・ナイロンジッパー？」

「そう。これくらいの大きさ。縁が赤くて、中が透明。」

彼は、10センチ四方ぐらいの大きさを、両人差し指で空中に描いて見せる。

「そのメモリーカード、優希が貰ってくれない？」

彼はニツコリとほほ笑んだ。

「中をあけてもいいし、いいのがあれば1、2枚くらい持っていてもいいけど、」

基本的に、処分してほしい。」

「え……処分？あたしが？」

「うん。会社に入ってからのはっかだから、優希が見た方がよくわかるだろうし、

大量だから、俺の両親が持っけていても……どうせ処理しきれないだろうし。」

まるで日常の用事を頼むかの如く、当り前のようにさらっと言う。あたしは少し戸惑った。

「でも……ご両親は、全部見たいし、持っけていたんじゃない……」

「いや、いいんだ。中身はほんと、仕事関係の写真ばっかで、時たま優希とのデートや社員旅行が写っけてる適度だから。

適当にピックアップして、それを両親に渡してくれても構わない。」

彼はあたしの顔を覗き込んだ。

「お願い、出来るかな……？」

「……うん。わかった。大丈夫。」

あたしはこくん、と頷いた。

大丈夫。ちゃんと、やるよ。

あなたのお家に一人で行って、ちゃんとお母さんと話をつけてくる。

だから、安心して。

「よかった。ありがとう。」

彼はあたしをそっと抱き寄せると、耳元に口を近づけて囁いた。

「キス、してもいい？」

あたしは彼を見上げた。

女の子みたいに睫毛の長い綺麗な瞳が、ふわふわの前髪の下で、切なそうに輝いている。

あたしはそっと目を閉じた。

彼の柔らかい唇がふわっと降りてきて、ああ、久しぶりだなあ、この感触、と思った。

あたし達は会う度に、本当によく、キスをした。

人前でいちゃいちゃ、程ではなかったけど、

挨拶代わりに、ふざけながら、車の中で、電車の中では軽く、そし

てベッドの中で、

あたしも舜も、キスが大好きだった。

手を繋ぐよりも、キスをした。

しばらくたってから、彼の唇がゆっくり離れた。

眼をあげると、彼がとても綺麗に笑っていた。

天使みたい、と思ったら、彼がにっこりと言った。

「時間だよ。」

パン！！！！！

割れるような音がした。

瞬間的に眼が覚めた。飛び起きたりは出来なかったけど、なんとなくか、バキッと目が覚めた。

辺りはまだ暗い。枕元の時計は、まだ4時過ぎだった。

ちよつと、早くない？まだもつと、話をしたかったよ。あれだけじゃ、足りないよ。

なに、『時間だよ』って。嘘ばかり。まだあと2時間以上あるじやん。

あたしは布団の上に、呆然と座った。

しばらくしてから、苛立ちの様なものが込み上げてきた。

勝手なんだから、勝手なんだから。

勝手に死んじゃって、一年たってからやっと夢に出てきて、勝手にいきなりメールして、

あたしを散々振り回して、

勝手に『時間だよ』って、なによ、それ。

あたしは布団の上でボロボロ泣けてきた。
舜の事が、好きで好きで堪らなかった。

でももう、夢でも会えない事が、何故だか分かった。

舜は、行ってしまった。

今日は金曜日だよ。あなたの命日は、明日。明日がタイムリミット
じゃ、なかったの？

泣きながら、心の中で少し可笑しくなってきた。

まったく、のんき者だかせっかちだか、分からない子なんだから。

六

その日はもちろん、メールは来なかった。

頭ではわかっていた。職場に携帯も持ち込めない。

何度か機会をみてチェックを試してみたものの、メールが来た形跡はなかった。

の。・・・形跡って・・・メールが来たって、すぐ消えちゃうじゃないの。

苦笑いができる自分がいる。

今までの信じられない出来事は、驚くほど信じる事が出来て、そしてこの上なく、あたしの心を軽くしていた。

さんざん泣いた後の、あのスッキリ感のように、心の付きモノが落ちたようだった。

それが自分でも驚きであり、滑稽でもあった。

何も言わずに突然死んでしまった舜^{しゅん}。

その彼が、あたしの気持ちを守るために出てきてくれた。あたしの気持ちを救ってくれた。

自分の為じゃない。きっと、あたしの為。

その夜、舜のお母さんから家に電話があった。

電話を取ったあたしのお母さんはとても驚いたようだったけど、あたしは全然驚かなかった。

驚かない自分に、驚いたくらい。

電話の内容は、明日の一周忌に、もし可能ならばあたしも出てほしい、というものだった。

舜のお母さんは電話の向こうで、あたしと話しているうちに泣きだしたようだった。

「・・・今頃、こんな連絡を差し上げてしまって、ごめんなさい・・・」

「・・・今まで、優希ゆしきさんに失礼をしてしまって、本当にごめんなさい・・・」

別に、舜のお母さんが失礼な人だとは思った事もないし、連絡を取らなかったのはあたしも同じだ。

「変な話だと思って・・・母親ってこんなに情けないものなのかと・・・夢に、舜が出てきたんです・・・今朝、ね・・・」

自分の失敗で、多くの人たちに迷惑をかけた、苦しませた、ごめんって・・・謝るんです。

僕のせいで、誰も不幸にならないでって。」

「母親って本当にみつともないわね。それで泣いて電話をするのだから。」と、舜のお母さんは泣き笑い声であたしに言う。

「それでね、私はとても反省したんです。息子に心配をかけてはいけないなって。」

私、初めから分かっていたいました。あの事故は、誰のせいでも、ましてや優希さんのせいでも

絶対にありません。・・・本当に、今まで失礼を致しました。申し訳ありません。」

泣きながら謝るお母さんを聞いて、あたしは「やっぱりこの人は舜のお母さんだ」と感心した。

この人は、すごい。

息子の死から立ち直ろうと、小娘のあたしに頭を下げている。

自ら、電話をして。

あたしは将来、もし母親になった時、こんな行動が取れるだろうか？
最愛の息子と最愛の彼氏、無くした痛みは、比べる事ができるのだろうか？

「舜が夢の中で、『彼女はすごい。闘っている。この間のメールが恐かった。』なんて言って一人で

笑っていたんです。きつと優希さんの事をいつているのだと思っ
たわ。

私、生前あの子からちょっとだけ、貴方の話を聞いたことがあり
ました。

すごく、さわやかで気配り上手なガンバリ屋さんだった。

その時、『恐いメール』の話でも聞いたのかしら、ね。」

舜のお母さんはそう言って笑って、あたしは涙で喉が詰まった。

一周忌には、時間をずらしてお伺いさせていただきたい、とあたし
はお願いをした。

その時、舜くんの荷物の中で、確認したい事があるんです、と。

舜のお母さんはちょっと不思議そうだったが、舜の荷物は全部、
あの子の部屋に置いてあるから
是非ご自由に、と言ってくれた。

当然の様に見つけた、赤い縁取りのナイロンジッパーのそれは、舜の遺品の小物入れの中に入っていた。

デジカメのメモリーカードが2枚、透明なカードケースに入れられていた。

家に帰ってそれをパソコンで見ると、『ほとんどが仕事関係』とは程遠く、その大部分があたしと舜の写真だった。

二人で2回ほど行った旅行の写真。

あとは、社内旅行の写真で・・・これは多分、彼が幹事の一人だったから・・・仕事の写真は、申し訳程度に30、40枚程度だった。どこかの物件の写真。

『仕事関係』と言えば、あたしが納得して引き受けると思ったのだろう。

確かに彼女と二人での旅行の写真が大量に見つかったら、お母さんやお姉さんの心中は穏やかではないのかもしれない。

はじけるような笑顔のあたし。幸せそうな舜。何枚もの、二人の写真。

基本的に処分してほしい、っていった彼が、今更ながら舜らしくって笑ってしまった。

きつと、あたしの心の重荷になりたくないって事なのね。やれやれ。自分、死んじゃっているくせに。

でもこれ、あたし一人の写真がいつぱいだよ。こんなの、あたしが持っけていても確かにしょうがないわ。

あたしは、海辺の夕日をバックに写っている二人の写真を見ながら、思う。

舜、安心して。

あたしは、あたしのやりたいように行動するから。

これは、いつか処分するよ。処分、したくなつた時にね。

だから、それまで持っているよ。

ごめんねー。そこまであなたに振り回されないわよ、あたしは。

それから3年たって、あたしは結婚した。
出会って半年の、スピード結婚だった。

彼は、向井君に似ているとは、言えない。舜とは、比べた事も無い。
海外旅行の好きな人で、色々な所に連れて行ってくれたが、
モルジブだけは、まだ行った事が無い。

一年たって、息子が生まれた。
舜、という名前はつけなかった。

今でも、携帯にメールの着信があると、どうしても期待してしまう。
だから、メールの着信に音は出さない事にした。日常生活が滞って
しまいそうだったから。

3歳になった息子は、昆虫に魅了されて、カブトムシやクワガタム
シ、カマキリまで
幅広く愛する。トンボなんかは、素手で羽を掴む。
その生き物好き(?)が高じて、保育園で飼育係に抜擢された。

飼育係はそれぞれ、担当の動物に名前をつけられるらしい。
保育園の帰り道、息子が嬉しそうにあたしを見上げた。

「カメの名前を決めたよ！シュンって、する。」

あたしは絶句した。

「なんで、『シユン』？」

「なんか、『シユン』って顔をしているんだ。」

どんな顔よ、それ。

啞然として、胸がドキドキしながら、息子を見ながら、ふと、あの時最後に見た夢を思い出した。

あの時舜が言った子供達、案外、あたし達の近くで話を聞いていたのかもしれない。

舜に、あたしの携帯を渡してくれた子供達。

舜の為に・・・あたしの為？

あたしは自分のお腹をそっとなでる。

今日、分かったばかりのこの命。これもひょっとしたら、男の子か

もしれないな。

でも、ペットに名前をつけたのは、あたしじゃないからね、舜。勘弁してね。

よりもよって、カメなんて。今頃、頭を抱えているのかしら。

六（後書き）

最後まで読んで下さって、本当にありがとうございます。

このお話は半分ぐらい、実話です。

どの辺りが実話かは、皆さまのご想像にお任せします。

幸せは、気の持ち方で変わるって事も、お伝えしたかった事の一つです。

がんばれ、女の子。

あ、男の子もね（笑）

では、次作も宜しくお願い致します。

2010年 10月 10日 戸理 葵

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1891o/>

カメの名前を決めたよ

2010年11月22日19時33分発行